

私の青春と「学徒出陣」を想ふ

大川市 江頭 俊夫

17年、戦局ますます苛烈とは知らされるが、大本営からはいっこうに日本軍の敗北は発表されない。旧制中学は5年が4年、専門学校は3年が2年半に短縮され、生活物資の統制は日に日に強化されていく中、発表とは裏腹に戦局の逼迫を肌で感ずるようになったが、スポーツに燃やす学生生活の情熱はいささかも衰えをみせなかった。

この1年、山岳班の私は同級生の吉野洋一、篠原康二らに1年生2人を加えた5、6人で九州山地の縦走をこころみた。阿蘇、祖母、韓国など九州の屋根を伝い、残り少ない学生生活の思い出に難関の山歩きに挑んだのである。やっと霧島を下り、ヘトヘトになって辿りついたのが鹿児島島の鴨池あたり。今の野球場附近であろうが、既にとっぷり日は暮れていた。幸い広い野っ原に出たので、急いでテントを張り、疲れ果て全員ぐっすり寝込んでしまった。時々、ゴーツという轟音が聞こえてくるが夢うつつ。「こらッ！」と、懐中電灯を突きつけられて飛び起きてみると、枕元に海軍の兵隊が立っている。「貴様ら何者だっ！ここをどこだと思っている？」驚いてテントの外に出て見ると、そこは海軍飛行場だった。おまけに滑走路から20m足らず。ゴーツという音は戦闘機が飛び立つ音だったのである。逮捕、とまではいかなかったが、尋問されたうえ「君達は軍の機密に近づいた。学生とはいえ一応は憲兵隊に引き渡すことになろう」と脅され、震えあがった。とはいうものの、近くの公園の音楽堂に案内され「ここで一晚過ごすがよい」といってくだんの海軍軍人は見張るでもなく、そのまま引き揚げて行ってしまった。『黙ってこのまま逃げろ』との暗黙の指示とみた僕達は、夜のしらむのを待って一目散。

日豊線の方に遠回りして乗り込み、発見されないように席はバラバラにとり、トイレに入って「鳩首会議」。果たして憲兵隊に届け出たであろうか。もし届け出ていれば、とっくに捕まっているはず。いや目下追跡中ではあるまいか。ヒソヒソ対策を練るが、恐怖心は増すばかり。とうとう登山とわかるものは全部捨ててしまえ。特に学校の証拠となるものは総て処分、と決まった。ピッケルもテントも、寝袋も…随分と高価、というより当時としては、もはや入手し難いものまで、惜し気もなく捨てた。帽子だけはたたんでバックの中に押し込んだ。

もし憲兵隊に捕らえられると、このあと万年二等兵の軍隊生活を覚悟しなければならず、それに学校の処分も穏便にはすまないだろう。だから証拠を隠滅して必死に逃げるのみ。幸い憲兵隊は追っかけて来なかった。

もし見つけたのが陸軍だったら、どうなっていたらだろうか。すっかり海軍ファンとなった僕たちは後に海軍予備学生に応募、戦線に参加することとなる。

いよいよ18年の多難な年が明ける。この1月早々にたばこの値上げ。「金鶏」10銭→15銭、「光」18銭→30銭、そして12月に再値上げの戦時インフレが加速していく。4月になると、東京六大学野球は停止。プロ野球のみ細々と続くが、選手は戦闘帽をかぶり挙手の

礼、用語は総て日本語（ストライク＝よし！ 一本、セーフ＝よし、アウト＝ひけ）となり戦争の暗雲は野球界にも重く垂れこめてきた。9月22日、ついに来るべきものが来た。理、工、医系を除く全大学高専の徴兵猶予停止が発表された。いわゆる学徒出陣である。翌10月21日、雨の東京神宮外苑で、東條首相を迎えての盛大な出陣学徒の壮行会が行われた。戦後ニュース映画などご覧の通りです。福岡高商（現福岡大学）8回生の繰上げ卒業式は9月23日。162人が巣立つが、ほとんどそのまま軍隊に直行する。この18年の秋から冬にかけて、実に200人あまりが七隈の丘から一挙に戦場へ馳せ参じた。来る日も来る日も、部の先輩、級友が出発する。その度に盛大な壮行会を博多駅頭で行った。市内の他校も同じだから、秋から冬にかけての博多駅前広場は出陣学生を送る学生達であふれんばかり。応援歌、ストーム、拍子、バンザイの声、旗の波で興奮の坩堝と化していた。この学徒出陣で動員された全国の学生は約3万5千人。「出陣」などという日本的浪漫、美的演出によって、自己犠牲的な悲愴感、陶醉感が強調されたが、待っていた戦場は生やさしいものではなかった。

歓呼の声に送られて行く側の心境はどうだったか。もはや生きては帰れない。私達はそれまで書き綴った日記を遺書代りに、愛読の『三太郎日記』『ウィンパー、アルプス登攀記』を寄せ書きの日の丸と共に胸に抱いて出陣したが、当時の学生達の胸傷む姿ではなかったでしょうか。

9月25日ごろ中洲の水上公園で市内各校の出陣学徒壮行会が行われた。狭い場所なので見送りの群衆でごった返し、市内電車も立往生。各校毎に博多駅前までパレード、駅前で壮行式。大野時達君（8回生）が代表で出陣の決意を語ったが、プラットフォームでストーム。激情の勢いで線路にまで流れこむ。そのため急行列車が10分以上も遅れてしまった。さあ大変、当時国鉄は定時運転が至上命令であり、事実戦前は国鉄ダイヤは世界一の正確さを誇っていた。当然博多駅長や上部セクション鳥栖駅長の責任問題が持ち上がった。悪いことに内田澄（8回生）は実父が鳥栖駅長だったそうである。しかし軍の方から詫びが入り、ことなきを得たという。

以下有信会報よりー

出陣学徒を送り出した権藤実教授の思い出『丸刈り、戦闘帽、巻脚はん、行軍、モッコかつぎ、板付飛行場のトロッコ押し、国情騒然。太平洋戦争突入。学校では出征する学生のため日の丸に毎日毎日寄せ書きをしました。予備学生へ、予備士官学校へ、学業を投げうって学生達は次々と去った』（石井義武教授の話）

戦後、恩師の石井義武先生はいつも、散華した教え子を思い『何の疑心もなく、一途に戦争に突っ込んで行った純情が哀れ』と涙ぐんでおられた。青春の賛歌であり、希望の歌であった応援歌『烈火の如く友よ行け…』は全く別れの歌となった。別れを飾る一片の肴、一滴の酒もない。ともに悲壮な時代に巡り合わせた悲しい青春であった。

満月に 踊り狂うて 友征きぬ （氏名不詳 10回生）

学生を 送る苦吟の 夜浅し （石井教授）

あれから50数年。光陰矢の如し。

只平和を祈るのみです。